

若年労働市場の変容と男性性の揺らぎ？

—YCSJ 調査不安定就労層男性の事例から—

首都大学東京 乾 彰夫

1. 課題

従来日本社会においては、長期雇用と年功賃金のもとで家計の大半を一人で担う男性と、パート等による家計補助的就労のもとで家事育児の大半を担う女性とのカップリングという家族像が「標準的」と想定されてきた。だが 1990 年代後半以降の非正規雇用等の男性への急速な広がり、その前提条件を大きく揺るがせている。契約社員等を含む非正規雇用の大半は、雇用の不安定性とともに正社員等に比べ低賃金でかつ年功賃金カーブからはずれた賃金体系のもとにあり、そのような条件は、「稼ぎ手 breadwinner」としての伝統的男性役割の遂行を困難にしている。そのなかで、例えば非正規雇用フルタイム就労・月収 20 万円程度同士のカップリングによる、新たな「第二標準」(中西新太郎 2009) など、就労・家事育児ともより対等なパートナー関係による家族形成の模索が提起されている。だが、実際のところ雇用をめぐるこのような変化は、男性の意識や生活にどのような影響を与えているのか。先行研究では、離転職経験のある男性に平等志向の高まりが見られるものの、不安定雇用経験は「稼ぎ手」意識に影響を与えていない(目黒依子ほか 2012) との指摘がある。ここではとくに、長期間にわたって不安定就労を続ける若年男性に焦点を当て、果たして彼らの男性性意識に平等志向的な影響が現れているのかを検討する。

2. 使用するデータ

使用するデータは「若者の教育とキャリア形成に関する調査(Youth Cohort Study of Japan)」である。YCSJ は 2007 年 4 月 1 日現在満 20 歳の全国サンプルを対象に同年秋から 2011 年秋までの 5 年間にわたって実施したパネル調査である。初回答者 1687 名、最終回答者 891 名(ウェイト付後サンプル数 768)であった。調査では 2005 年 4 月～2011 年 10 月までの期間の毎月の主な状態を質問しており、それをもとにオプティマル・マッチング法によって 8 つの移行類型が得られた。ここではその中の「早期離学・非正規雇用優勢」類型の男性(39 サンプル)に主に注目する。この類型はおよそ 2007 年 3 月(20 歳)以前に最終学校を離れ、その後 2011 年 10 月(24/25 歳)までの期間の大半を非正規雇用を中心に、間に失業・無業を挟むなど、正規雇用以外の状態で過ごしている。

	男性	女性	合計
①後期・正規	111	110	221
	34.4%	27.2%	30.4%
②早期・正規	64	102	166
	19.8%	25.2%	22.8%
③後期・非正規	21	43	64
	6.5%	10.6%	8.8%
④早期・非正規	39	63	102
	12.1%	15.6%	14.0%
⑤正規→非正規	15	18	33
	4.6%	4.5%	4.5%
⑥非正規→正規	6	22	28
	1.9%	5.4%	3.9%
⑦在学	58	22	80
	18.0%	5.4%	11.0%
⑧無業	9	24	33
	2.8%	5.9%	4.5%
合計	323	404	727
	100%	100%	100%

3. 結果

[全体の状況] 最終調査時点では男女とも 9 割前後が未婚である。男性では早期・正規類型に比較的既婚者が多い。また男女とも 7 割あまりが実親と一緒に暮らしている。ジェンダー意識では、結婚後の家事育児分担について、男性の 54%、女性の 40%が「夫と妻同じぐらい」と答えており、男性の方が意識の上では平等志向がやや高い。一方、結婚後の妻の就労については、男女とも「出産退職」15%前後、「出産退職・復帰」5 割弱、「就労継続」25%あまりと差がない。

「10 年後の見通し」については「同じ仕事を続けている」「安定した仕事についている」などで男性が上回るものの、「結婚している」では女性が上回っている。「職業に関する意識」では「家族を養

うこと大切」に男性の9割（女性8割弱）が肯定し、稼ぎ手意識は高い。「高い地位や収入」「ずっとフルタイム」など男性の職業意識は高いが、「就職・失業不安」「収入不安」なども男性に高い。

人間関係については、「一緒にいて安心できる人」が「いる」割合は男性85%女性94%と女性が上回り、その内訳でも親・恋人・高校以降の学校の友人など女性の方が人間関係を豊富に持っていることがうかがわれる。

【早期非正規男性の状況】早期非正規男性のほとんど（97%）が未婚で大多数（90%）が実親と同居。また非3大都市圏定住者の割合が顕著に高い。

ジェンダー意識では、家事育児分担「夫と妻同じぐらい」の割合は男性平均よりも高い（63%）ものの3年前（77%）に比べやや低下している。また結婚後の妻の就労については全体平均との間に有意差は認められない（3年前は「就労継続」がやや高め）。

「10年後の見通し」では「同じ仕事」「安定した仕事」で顕著に低いほか、「結婚している」が顕著に低く（42%）、3年前（61%）からもかなり低下する一方、「親と暮らしている」（53%）「今の地域に住んでいる」（79%）が顕著に高くかつ3年前（32%、71%）より上昇している。「職業に関する意識」では「家族を養うこと大切」で男性平均と同程度である（2年前から変化なし）とともに、「同じ会社で続けたい」が「就職・失業不安」「収入不安」とともに平均値を上回っている。

人間関係では「安心できる人」がいる割合は男性平均値を下回っており、内訳でも親・恋人・高校以降の学校の友人で男性平均値を下回るほか、それらすべてで4年前よりも低下している。親と同居しながら一緒にいて安心感を得られない、地元で暮らし続けながら学校時代の友人と疎遠になっているなど、孤立感の進行が窺える。

また「自分に関する意識」でも「今のままでよい」「自分らしく生きている」とも4年前よりも低下して、男性平均値を顕著に下回っている。自己肯定感の低さが目立つ。なお同じ早期非正規でも女性には、このような傾向は見られない。

4. 結論と考察

以上の結果からは、長期にわたる不安定雇用を続ける若年男性の中では、それによる稼ぎ手意識の低下や平等志向の上昇といった男性性の変化の兆しは今のところ認められない。従来型の家族形成への困難に直面する中でも彼らの多くは「稼ぎ手意識」を維持し続けるとともに、「同じ会社で働き続けたい」など何とか従来型に到達することを指向している。その結果として現れてきているのは、結婚をあきらめるという選択肢である。結婚をあきらめ、地元で親とともに暮らし続けるという見通しは、しかし、決して彼らにとって心地よいものではない。彼らの多くは大都市部以外の地域に暮らしている。しかしそこに見られるのは、阿部（2013）の描いた「ほどほどに快適な地方都市」で家族や友人らとともに「ぬるま湯的な居場所」を確保している姿よりは、赤木（2007）の描いた「車がないとまともな生活もできない」地方で、親とそりが合わなくても家を出て行くことさえままならない、しかもこの「状況すらいつまで続くか分からない」、そんな鬱屈した孤独感を抱えた姿に近い。若年非正規男性の多くにとって「第二標準」が未だ現実的な展望となり得ていないのは、「稼ぎ手意識」から抜け出られない彼らのジェンダー意識のせいなのか、それとも「第二標準」を現実的展望とさせるための諸条件が未だ欠落しているせいなのか、その点については今後さらに検討されるべき課題である。

若者の教育とキャリア形成に関する研究会（2014）『最終調査結果報告書』

<http://www.comp.tmu.ac.jp/ycsj2007/dl2/ycsj2007rep05.pdf>

中西新太郎(2009)「漂流者から航海者へ—ノンエリート青年の〈労働—生活〉経験を読み直す」中西・高山編『ノンエリート青年の社会空間』大月書店

目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編(2012)『揺らぐ男性のジェンダー意識』新曜社

阿部真大（2013）『地方にこもる若者たち』朝日新書

赤木智弘（2007）「希望は戦争 『丸山真男』をひっぱたきたい」『若者を見殺しにする国』双風舎